

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 梶 茂樹

学位申請者 林 虹瑛

論文名 台湾閩南語音韻研究—梧棲鎮閩南語を中心に

本論文は、台湾台中県梧棲鎮に話される閩南語の音韻に関する包括的研究である。閩南語は台湾では、国民の3分の2が話す最も広範囲に用いられている言語で、台湾では台湾語とも呼ばれる。

現在、台湾には、主な言語として、先住民の話すオーストロネシア系原住民諸語に加えて、多くは清朝以降、福建、広東から渡ってきた人の子孫の言語である閩南語と客家語、そして第二次大戦後、国民党と共に大陸から渡ってきた人たち及びその子孫の話す漢語系言語がある。台湾では戦後、国民党支配下のもと、中国の普通話に近い華語を国語とし、国語運動を強力に推し進めた結果、現在では、閩南語を含む土着言語の弱体化が起こっている。本研究は、そういった中で、台中県梧棲鎮に話される閩南語を主たる対象に出来るだけ正確に、かつその音的メカニズムの内部に立ち入って考察しようという意欲的な研究である。また、梧棲鎮閩南語をより包括的に考察するために、インフォーマントの祖籍地である中国福建省泉州市安溪県駟嶺村でも4度のフィールドワークを行い、その音韻体系を含む言語構造を記述・分析した。

また、台湾の閩南語を特徴づけるものの1つに、日本語との接触を通じた借用語を始めとする多くの影響がある。本論文では、これらを積極的に評価することによって、大陸の閩南語とは異なる歴史を歩んできた台湾閩南語の姿を描き出すことに成功した。

本論文は、以下のような構成になっている。

- 第1章 序論
- 第2章 梧棲鎮閩南語の音韻体系
- 第3章 台湾閩南語における日本語の借用
- 第4章 日台会話新歌
- 第5章 結語

まず、第1章では、台湾閩南語研究の前提条件として、台湾の歴史、地理、言語状況をまとめ、漢語内部における台湾閩南語の位置づけを行う。また、研究対象となった閩南語の話される台中県梧棲鎮についても説明が行われる。この地域に漢人が大陸から渡ってきたのは清朝康熙中期のことであり、その多くは泉州系であり、台湾では、この方言は海口なまりとして知られている。

第2章は、閩南語の音韻体系に関する考察であり、本研究の中心部分を占める。ここ

では、梧棲鎮方言の子音音素、母音音素、子音と母音の組み合わせ、音節構造、超分節素、アクセントが詳述される。

まず子音であるが、音声的には[p, t, k, ʔ, p^h, t^h, k^h, b, g, p], t], k], ts, tɕ, ts^h, tɕ^h, s, ɕ, h, l, m, n, ŋ]が現れるが、音韻的には/p, t, k, ph, th, kh, b, g, ts, tsh, l, s, h/の13種類とされる。音節頭子音では、鼻音[m, n, ŋ]は、鼻母音の前にしか現れず（ただし[m]および[n]は音節主音的鼻音[ŋ]の前にも現れる）、口母音の前にしか現れない[b, l, g]とそれぞれ相補分布をなす。声門閉鎖音[ʔ]は、頭子音として現れる場合も、現れない場合もあるが意味の区別を生じない。破擦音[tɕ]、[tɕ^h]、摩擦音[ɕ]は、それぞれ後に前舌高母音/i/が続く場合の/ts, tsh, s/の異音である。

問題は音節末である。音節末に現れる子音は、[p], t], k], ʔ, m, n, ŋ]の7種類である（）マークは閉鎖の無開放を示す）。林氏は、声門閉鎖音[ʔ]は声調として解釈し、分節音素としては/b, l, g/の3種類であるとする。そして、それがそのまま現れる場合は、それぞれ鼻音[m, n, ŋ]に、その後に声門閉鎖音[ʔ]がつく場合は、[p], t], k]になると分析する。そうすることによって音声的に7種類ある音節末の子音を/b, l, g/の3種類にまとめることができる。これは本論文の独創的分析であるが、同時に大きな争点でもある。

音節末の声門閉鎖音を声調として解釈すること自体は林氏の独創ではない。母音の後の声門閉鎖音については、李がすでに“On the Nature of Syllabic Final -?” (1989)において、声門閉鎖音韻尾が開音節と韻をふむことなど、また鐘が『台語的語音基礎』(2000)において、閉音節には鼻母音は現れないが声門閉鎖音は現れることなどの証拠を挙げ、声門閉鎖音[ʔ]を分節素としてではなく声調として解釈することの利点について述べており、林氏はこれを踏襲している。しかしながら、[p], t], k]をそれぞれ/bʔ, lʔ, gʔ/で解釈することは林氏の独創である。

その分析の根拠として、林氏は、[p], t], k]が、kap³²合, kat³²結, kak³²角のように短い声調の入声でのみ現れて、[m, n, ŋ]がその他の声調（舒声）で現れること、また、これらがすべて口腔無開放という特徴を持っていることに注目する。前者については、[p], t], k]と[m, n, ŋ]が相補分布にあること、そして後者については、子音が有声の/b, l, g/であっても声門閉鎖音が伴えば無声として生じうる可能性を伺わせるものである。実際、林氏は、岩田が「南部中国語の音節末閉鎖音」(1984)において、音声学的・生理学的観点から、閩南語では音節末閉鎖音には常に声門閉鎖が伴っていると指摘していることを受けて、[p], t], k]は、実際には[p]ʔ, t]ʔ, k]ʔであるとする。ところで、声門閉鎖音が子音の閉鎖と同時に現れた場合、その子音は、有声であっても声帯を振動させる前に声門が閉じてしまうため、有声音が出しにくくなることから、[p], t], k]すなわち[p]ʔ, t]ʔ, k]ʔは、音韻的には、それぞれ/bʔ, lʔ, gʔ/と分析できるとするのである。

閩南語の主核母音音素は/i, ī, e, ē, i, ə, a, ā, u, ū, o, ɔ, ɔ/の13種である。閩南語母音の特徴は、鼻母音があることと、/iau/, /uai/などの三重母音があることである。さらに音節主音的鼻音がある。これは、音節末鼻音を/b, l, g/と解釈したため、本論文では、/hb¹³/ [hmt¹³] ~ [hŋt¹³] 媒（仲人）、/pg³³/ [pŋ³³] ~ [piŋ³³] 飯のように、音素としては有声閉鎖音を立てざるをえない。

閩南語の声調には、単語調（本調素）と連語調（変調素）の交替があり、単語調は、第1声/55/、第2声/53/、第3声/11/、第4声/3/、第5声/13/、第6声/33/、第7声/33/、第8声/3/のようである。なお第6声と第7声は単語調でも連語調でも合流しているが、第4声と第8声は単語調では同じでも連語調では異なる。また本章はアクセントについても考察を行うが、閩南語においてはアクセントの研究は未開拓の分野であり、先駆的研究となっている。

第3章は、台湾閩南語における日本語からの借用語の問題を扱う。台湾では日本語は

戦後、その公用語的地位を失ったが、現在でも数多くの語が借用語として台湾閩南語の中で用いられている。林氏は、先行研究をもとに自ら採取した約 200 語について、大きく、日本語漢字を閩南語読みするものと、日本語発音をそのまま借用したもの（音訳借用語）の 2 つに分け、分節素、モーラ、音節、アクセントなどの特徴について詳細に検討した。その結果、例えば、閩南語では母音の長短の区別は区別されないため、日本語の長音などのモーラ音節は、声調で区別されるなど、一定の法則性を持って借用が行われていることが明らかにされる。

借用語は、同じ閩南語でも大陸の閩南語と台湾の閩南語とで大きく異なる部分である。閩（福建）地方は長い間、中原から漢語を借用してきたし、また海外に出かけていった華僑がもたらした語もある。それに対して台湾の閩南語が借用するのは、かつては圧倒的に日本語であった。そして借用元の言語である日本語の発音をそのまま借用するという音訳借用語方式が確立している台湾の閩南語では、この方法がこれからの語彙を増やす 1 つの方法であると林氏は言う。

第 4 章は、台湾の歌謡、物語などの民間文学の総説から始めて、その中でもともと台湾にあった「歌仔冊」(kua¹ a² tshe⁴) と呼ばれる娯楽的内容を韻文形式で表した冊子体の解説を行い、続いて、この形式に基づく「日台会話新歌」の考察が行われる。「日台会話新歌」というのは、日本統治時代に、台湾の庶民に日本語を覚えさせようとして、伝統的な「歌仔冊」の形式を守りながら日常の内容を閩南語と日本語で表した一種の対訳集である。そこでの日本語は、日本語として完全なものではなく、かえって現在の閩南語において日本語が使用される際の特徴と通じている。林氏のこの研究は、第 3 章で扱った台湾閩南語における日本語からの借用語の研究の延長線上に位置づけられるものである。

「日台会話新歌」のような日台混濁文については、これまで積極的な研究上の価値が与えられることはなかった。しかし、これは内容的にも言語的にも当時の社会状況を如実に反映させた極めて学問的価値の高いものである。そこでは、1 行を 7 音節、そして 4 行を 1 連とし、韻を踏ませた厳格な形式の中で、閩南語と日本語が記されている。これは「日台大辞典」や「台日大辞典」のようなアカデミックな体裁のものとは異なった庶民の側の日台言語接触を記したものと見るべきである。林氏は、逆にこれをうまく利用して閩南語の音節構造を解明した。

第 5 章は、1 章から 4 章までの総括である。

本研究の意義は、まず閩南語をそれ自体として観察し、その構造を閩南語に即して記述したことである。多くの中国語方言研究が、中古漢音との対応を中心にして通時的観点からものを見るため、その方言自体の体系がわかり難く、またえてして音声と音韻の区別が曖昧になるのに対して、本研究はまず台湾閩南語梧棲鎮方言の共時的記述を目指したため、閩南語自体の持つ体系性を重視した分析が行われている。同時に、閩南語を単に共時態にのみ押しとどめるのではなく、音節構造の分析に見られるように、閩南語の音節構造を、伝統的な「声母+韻母= (介音+韻基= (韻腹+韻尾)) / 声調」の枠で分析することに成功した。また、台湾閩南語を、それが被ってきた様々な変化の中で記述を行い、変化の中でたくましく生きてきた様を描き出すことに成功した。

審査委員からのコメントとしては以下のようなものがあつた。第 2 章の音声・音韻的分析と、第 3、第 4 章の関連が必ずしもはっきりとしない。梧棲鎮閩南語の主たるインフォーマントは 2 人であるが、これが梧棲鎮閩南語を代表していると言えるか。音節末の [p], [t], [k] を、それぞれ /b?, l?, g? / から派生させる分析について、音節末の有声閉鎖音が破裂を伴わなければ無声的になることは考えられるが、それならば同じ環境で無声閉鎖音もやはり [p], [t], [k] となるのであり、[p], [t], [k] を有声閉鎖音からのみ派生させるのは

無理があるのではないか。また韻尾の声門閉鎖音と声母の声門閉鎖音とでは、取り扱いに整合性が欠けるのではないか。声調現象は非常に詳しく記述されているが、まだ観察し残しがある。せつかく福建省の閩南語についても調査をしているのに、それが体系として示されていない。梧棲鎮閩南語と他の台湾閩南語との関係にも触れてほしかった。台湾の閩南語の歴史については、漢人とオーストロネシア系原住民、特に平地に住むいわゆる平埔族との関係も視野に入れるべきではないか、などである。

本研究は、台湾梧棲鎮閩南語の最初の総合的音韻論研究である。個々の問題については、これから研究を深めていく余地はあるが、公開審査による最終試験において、林氏はその能力を有することが証明された。よって、本論文は博士（学術）の学位を与えるにふさわしいものであると審査委員全員が一致した。